

2021年8月2日

日本イーライリリー株式会社

〒651-0086  
神戸市中央区磯上通 5-1-28  
www.lilly.co.jp

EL21-37

## 絵画・写真・絵手紙コンテスト 「リリー・オンコロジー・オン・キャンパス がんと生きる、わたしの物語。」 第11回の受賞者を発表・表彰

絵画部門 最優秀賞 時岡 桃加さん(滋賀県)  
写真部門 最優秀賞 高橋 貴久男さん(大阪府)  
絵手紙部門 最優秀賞 中村 美幸さん(長野県)



【オンライン会見の様子】

日本イーライリリー株式会社(本社:兵庫県神戸市、代表取締役社長:シモーネ・トムセン、以下、日本イーライリリー)は2021年7月30日、オンラインにて、第11回「リリー・オンコロジー・オン・キャンパス がんと生きる、わたしの物語。」絵画・写真・絵手紙コンテストの授賞式を開催し、絵画部門・写真部門・絵手紙部門あわせて90件の応募作品の中から、6名の受賞者を発表し、表彰しました。

### 第11回「リリー・オンコロジー・オン・キャンパス がんと生きる、わたしの物語。」受賞者

#### 【最優秀賞】

絵画部門: 時岡 桃加(ときおか ももか)さん (滋賀県栗東市/23歳)『約束の卒業式』  
写真部門: 高橋 貴久男(たかはし きくお)さん (大阪府大阪市/60歳)『生きる喜び』  
絵手紙部門: 中村 美幸(なかむら みゆき)さん (長野県千曲市/50歳)『がん細胞くんへの願い』

#### 【優秀賞】

絵画部門: 松浦 美郷(まつうら みさと)さん (北海道旭川市/37歳)『つながってるよ』  
写真部門: 系数 貴子(いとかず たかこ)さん (沖縄県島尻郡/52歳)『二人で』  
絵手紙部門: 三好 亜希子(みよし あきこ)さん (埼玉県八潮市/45歳)『ご褒美みたいな夜ですね』

日本イーライリリーの執行役員でオンコロジー事業本部長の小嶋 毅彦は、次のように述べています。  
「リリー・オンコロジー・オン・キャンパスは、この度 11 年目を迎えることができました。受賞者、審査員、そして応援して頂いている皆様に感謝を申し上げます。本コンテストの作品とエッセイは、“がんと共に生きる”姿勢や想いがこめられ、そこから感動や勇気を与えてくれます。日本イーライリリーは、一人ひとりの患者さんや支援者の皆さんを繋げる“場”を今後とも提供し、がんになっても自分らしく生きられる社会の実現に向け、これからも皆さんと歩んで参りたいと思います。」

第 11 回の受賞作品は、リリー・オンコロジー・オン・キャンパスのウェブサイト(<https://www.locj.jp/>) および Facebook(<https://www.facebook.com/locjChannel>) に今年 8 月公開予定。

### <第 11 回「リリー・オンコロジー・オン・キャンパス がんと生きる、わたしの物語。」 募集・審査について>

募集期間：2020 年 9 月 15 日～2021 年 1 月 31 日

応募件数：絵画部門 37 件 写真部門 26 件 絵手紙部門 27 件

募集テーマ：「がんと生きる、わたしの物語。」

審査：【最優秀賞、優秀賞、入選】

絵画・写真・絵手紙作品ならびに制作背景を綴ったエッセイについて、作品の技術的・芸術的な評価よりも募集テーマを的確にとらえた作品であるかを重視し、以下 5 名の審査員により 2021 年 4 月 16 日に一部オンラインで審査が行われ、最優秀賞、優秀賞、入選の計 12 点を決定しました。

審査員：岸本 葉子(エッセイスト)

堀 均(公益財団法人 日本対がん協会 がんサバイバークラブ)

西村 詠子(NPO 法人 がんとむきあう会 理事長)

森 香保里(四国こどもとおとなの医療センター アートサイコセラピスト)

亀山 哲郎(フォトグラファー) ※順不同／敬称略

賞：最優秀賞(各部門 1 名)、優秀賞(各部門 1 名)、入選(若干名)

### リリー・オンコロジー・オン・キャンパスについて

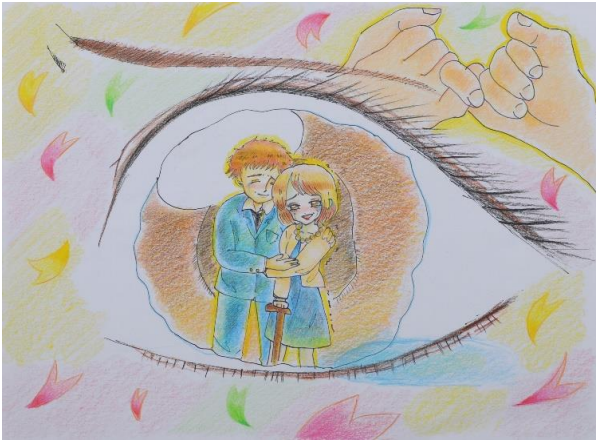
リリー・オンコロジー・オン・キャンパスは、がんと告知されたときの不安や、がんと共に生きる決意、がんの経験を通して変化した生き方などを作品とエッセイで表現し、多くの人と想いを分かち合っていた「場」として、日本イーライリリーが2010年に創設しました。

### 日本イーライリリーについて

日本イーライリリー株式会社は、米国イーライリリー・アンド・カンパニーの日本法人です。人々がより長く、より健康で、充実した生活を実現できるよう、革新的な医薬品の開発・製造・輸入・販売を通じ、がん、糖尿病、筋骨格系疾患、中枢神経系疾患、自己免疫疾患、成長障害、疼痛、などの領域で日本の医療に貢献しています。詳細はウェブサイトをご覧ください。<https://www.lilly.co.jp>

【最優秀賞】 絵画部門

時岡 桃加(ときおか ももか)さん <滋賀県栗東市> 作品タイトル『約束の卒業式』

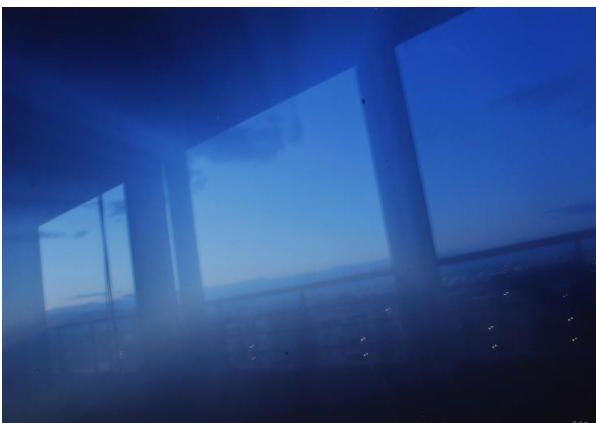


■エッセイ(抜粋)

当時小学五年生だったとき、母が悪性リンパ腫になったと伝えられた。お見舞いに行くと、母が私を手招きしこう言った。「桃の卒業式までには必ず治して行くよ。だから指切りげんまんしよう」。私と笑顔で指切りした。それから一年、必死の闘病生活の末、短時間の外出ができるまでに母は回復した。しかし、卒業式の前日、容態が悪化し、明日の外出を止められた。卒業式当日、沢山の保護者がカメラを向け涙を流し、我が子に手を振る様子を見て私は何故ここにいるのだろうと疑問と苛立ちを覚えた。ひな壇上から初めて見渡した時、会場の隅、そこには椅子にも座らず、私を見つめ泣きながら微笑む父と母の姿があった。母はカツラを被り、今にも倒れてしまいそうな細い体を杖と父に支えられ、必死に立っていた。私は瞳のレンズで二人の姿を写し続けた。あの時、交わしたゆびきりのぬくもりを永久に忘れる事はない。瞳の中にはいまでも鮮明にあの日の光景が残っている。

【最優秀賞】 写真部門

高橋 貴久男(たかはし きくお)さん <大阪府大阪市> 作品タイトル『生きる喜び』



■エッセイ(抜粋)

私は、多発性骨髄腫、全身の骨が溶かされる珍しいガンらしい。当初余命 3 年と言われたが、4 年半が経過した。闘病生活は辛い苦しいしんどい。あたりまえ。絶対安静で許されたベッドの角度は 45 度、目線の高さは 1m。そんな中でも楽しみが大切と、私は好きなカメラを病室に持ち込んだ。夏のある日、普段より朝早く目覚めた私は、窓の外に見える朝焼けに心を奪われた。短時間に空の色や雲の形や大きさを刻々と変えていく、その偉大さ美しさ感動。日々の身体の痛みをも忘れるほど、病室からカメラを楽しむ私がいた。心と身体は繋がっているんだ。好きなことをやってると身体も喜んでくれるんだ。たかだか、全身の骨が溶かされているだけやん。こんなんでへこたれてたら笑われるなって思った。半年の入院生活で撮りためた写真は 5000 枚を越えた。この一枚は、朝焼けの光に「生きる喜び」を感じ、日々の治療も前向きにしてくれた一枚でもある。

## 【最優秀賞】 絵手紙部門

中村 美幸 (なかむら みゆき) さん <長野県千曲市> 作品タイトル『がん細胞くんへの願い』

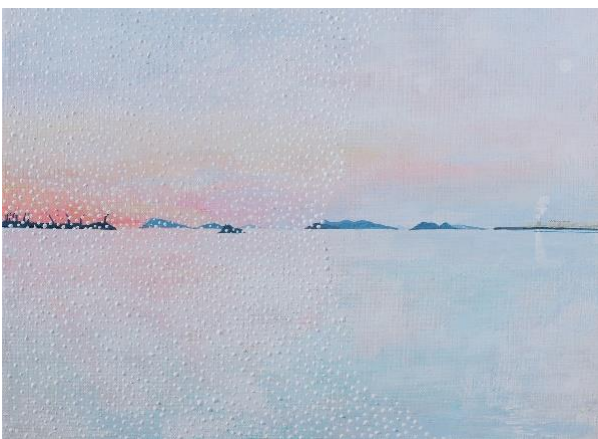


### ■エッセイ(抜粋)

小児がんを発症し、「余命3か月」という宣告を受けたのは、生後4カ月のときでした。世界的にも珍しい希少がん。息子の闘病生活がスタートしました。「死の淵に立たされている」というような状態で、私は絶望感に襲われました。絶望感を蹴散らすかのように私は、「なんとしてもがん細胞を倒してやる!」と戦闘心に火をつけました。でも、闘うべき相手は息子の身体の中。がん細胞は愛する息子の一部のようなもの。がん細胞が憎いのにも憎みきれないというやるせない思いが募りました。治療が最終段階に近づくと、先生から「治る可能性はほぼない」ことを聞かされました。必死にがん細胞と闘ってきましたが、もう敗北を認めてがん細胞に「お願いごと」をしよう…。それから息子のお腹に手を当てながら、「がん細胞くん、お願い…。ここにいてもいいから、おとなしくして…」と祈る日々。「お願いごと」は聞き入れてはくれませんでした。願いと祈りの時間は、私たち親子を穏やかに優しい空気が包み込んでくれました。

## 【優秀賞】 絵画部門

松浦 美郷 (まつうら みさと) さん <北海道旭川市> 作品タイトル『つながってるよ』



### ■エッセイ(抜粋)

2020年が終わろうとしていたあの日、近くの海辺へ出かけました。夕焼け空に白い月が浮かび、昼と夜、空と海の境目も失いそうなひとときでした。帰宅した時、大切な人が亡くなったという知らせが届きました。私は悪性リンパ腫を経験したものの、寛解して今は元気に生活しています。だから彼が急性リンパ性白血病になった時も、絶対元気になるんだ!と、不安に勝る自信がありました。仲間たちと起業し、人と人やモノとモノをつなげるために全力で走っていた彼。私が境目を見失いそうな景色を見ていたとき、彼も違う次元への境目にいたのです。彼が境目を越えたその瞬間、彼の体からエネルギーの塊が飛び出し、見えない粒子となって、みんなの元へ解き放たれていったと感じます。その粒子ひとつひとつと繋がって、彼と共に、まだやるべく走り始めています。そんな彼は、新しいエネルギーを蓄えて、きっと前を走っているんだと思います。また新しいプロジェクトの話聞かせてもらえる時まで、私も走り続けたいと思います。

**【優秀賞】 写真部門**

系数 貴子(いとかず たかこ)さん <沖縄県島尻郡> 作品タイトル『二人で』



■エッセイ(抜粋)

癌を患う父と認知症の母。支え合い、想いあって2人で暮らしている。母は父のむくんだ足をさすり、父は母に食事を用意する。よく「2人で1人」と笑いあう。5年前、父が末期の肝臓がんとわかった。「2週間、長くて1カ月」とつげられたとき、娘の私は絶句した。父と母に、余命については言えなかった。父は、忙しく過ごすことで、どうにか自分を保っているように見えた。そして、しだいに弱っていった。5年経って、父はいまも生きている。奇跡的に肝臓がんが小さくなったのだ。「毎朝、目がさめると、今日も生きていることに感謝しているんだよ」と父は言う。母の認知症は5年の間に少しずつ進行してきた。母の誕生日前、内緒で花を買ってきてくれと父から頼まれた。カメラを向けると、照れながら花束を手渡す父と満面の笑みで受け取る母がいた。父の癌は肺に移転し、再び体力を奪い始めている。1日でも長く2人が一緒にいられますように。そう願いながらシャッターを切った。

**【優秀賞】 絵手紙部門**

三好 亜希子(みよし あきこ)さん <埼玉県八潮市> 作品タイトル『ご褒美みたいな夜ですね』



■エッセイ(抜粋)

病棟の窓から見えた小さな花火に、思わず私は呟いた。「ご褒美みたいな夜ですね」季節は12月。月が綺麗な夜だった。今年の夏、私は癌患者になった。悩んで不安で、苦しくて仕方のない時間を積み重ねて、今ここに居る。コロナの影響で、入退院の付き添いも面会も一切禁止の静かな病棟で、今年初めて見る5分間の花火は、頑張ったご褒美としか思えなかった。私の父は去年の今頃に末期癌で余命宣告を受けた。まさかその一年後、娘の私までがんになるとは想像すらしなかった。自分が癌になった事で、知ることが出来たことがある。父の気持ちを何一つ分かってなどいなかったということだ。父の『痛い』や『怖い』がどれだけのものか、私は分かったつもりでいただけだった。父の言うことも、言わないことも、いまなら少しだけわかる気がする。今だから出来ることがあると思う。癌と共に歩こう。父と共に歩こう。そして次は父と共に空を見上げよう。